

この度の東日本大震災において被災された皆さまに対し、心よりお見舞い申し上げます。
また犠牲となった方々、ご遺族の皆さまに対し、深くお悔やみ申し上げます。



女川町でJIM-NETメンバーと鎌田が巡回診療中

熱い熱い応援を いただきました。

7年間、イラクの病気の子どもたちを支援してきました。
イラクで白血病の子どもが多くなる中、イラク戦争で使
われた劣化ウラン弾のことが気になり、少しでも危険な
武器を戦争で使ってほしくない、と思ってきました。
この地球上から、戦争をなくしたいとも考えてきました。

* * * * *

3.11 東日本大震災

そんな中、3月11日、日本で大変なことが起こりま
した。震災と津波で大変なことが起きている。すぐに
JIM-NETのスタッフが宮城の支援に入りました。ス
タッフからは想像を絶する壊滅的な街の状況、とりわ
け石巻市の壊滅的な状況が報告されてきました。こう
した中、昨年一年間、イラクで感染症対策マニュアル
を浸透させるプログラムをおこなった川添看護師か
ら、救援に入りたいという知らせが入りました。石巻
市の隣にある涌谷町の町立医療福祉センターは諏訪中
央病院と同様に地域医療で有名です。ぼくの友人であ
るセンター長は、病院の研修センターの一角をJIM-
NETの拠点として貸してくれると言ってくれました。

JIM-NETが本格的に東北支援に入ったのは被災後、
二十日ほど経ってからでしたが、佐藤事務局長とと
もに見た石巻や女川町の光景は壮絶でした。女川町

NEWS

東日本大震災被災地支援状況 ... P.1-4

- ・被災地支援状況報告
- ・イラクと被災地
- ・河北地区での医療支援
- ・3.11後の被災地と千人風呂プロジェクト

イラク現地報告 P.5-6

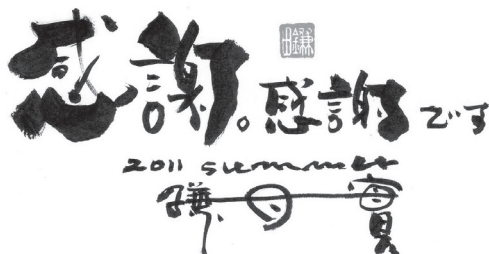
到着から1か月 P.7

参加団体ご紹介 P.7

新現地スタッフ紹介 P.8

グッズ紹介 P.8

局長くん第6話 P.8



鎌田実 (JIM-NET代表)

で巡回診療したとき、不眠を訴えてきた三十歳代の女
性は診察中、徐々に涙声になりました。3歳の男の子
が見つからないと言います。そのお母さんを精神的に
支えつつ子どもを探すのにも協力しました。1週間ほ
どして子どもは亡くなって見つかりました。東北には
悲しみがあふれています。しかし、家を流され、家族
を失い、仕事も無くなった絶望の中で、東北の人たち
は必死に立ち上がろうとしています。

JIM-NET各理事了解の下、イラクの支援を続けなが
ら、当面、東北の支援も並行して行おうと決めました。

千人風呂プロジェクト

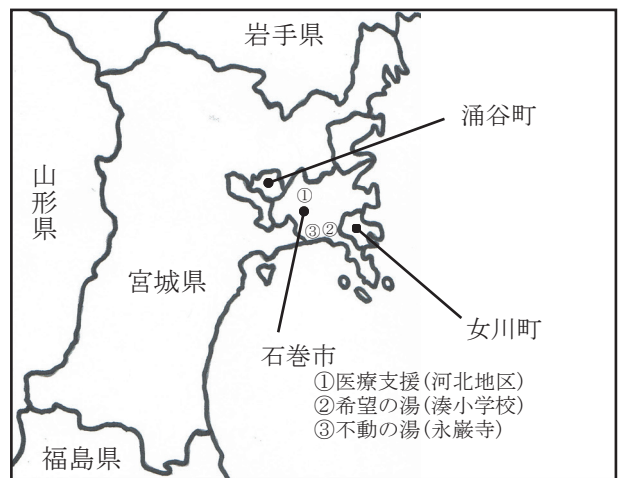
JIM-NETが東北に入ったとき、3週間経っているの
にもかかわらず多くの人がお風呂に入っていないこと
がわかりました。そこで千人風呂プロジェクトを立ち
上げました。まずは永巖寺の境内で、松本のルピナ工
業さんの応援を受け「不動の湯」を開湯しました。こ
の地域はほとんどの家が一階の天井まで浸水し、お風
呂がまったく使えない状況です。お風呂は大変喜ばれ

ました。震災2か月後、地域の人たちと話し合いをもちましたが、「このお風呂はどうしても必要、命を支えてくれる風呂だ」とまで言われています。一方、湊小学校では、十日町のグリーンエナジーという会社が協力を申し出てくれました。巨大なお風呂と TENT、バイオマスボイラーはおむつや生ごみなど全部燃料にできてダイオキシンがでない優れものです。ここには JIM-NET 参加団体のひとつ、アラブの子どもとなかよくする会の西村さんが応援に入ってくれました。東北大学の学生や、北海道や四国からはるばる応援にかけつけてくださったボランティアの方々、とても有り難いことだと思っています。石巻市長さんはここを「希望の湯」と命名しましたが、たくさんの方から「希望」そのものだと言われました。またバスをチャーターして、避難所の人たちを隣の涌谷町の天平の湯へお連れするプログラムもあります。

避難生活が長期化する中、感染症対策が重要となります。入浴はとても大切な対策のひとつ。しかもお風呂に入るとほっとして元気も出て、生きようと思えるのです。

河北地区医療支援

川添看護師は石巻市の中の巨大な地域、河北地区の在宅ケアを任されました。サポートに入った重岡看護師とともに、床ずれができて苦しんでいる患者さんや末期がんの痛みに震えている患者さんなど、孤立していた患者さんたちを各戸訪問などにより見つけ出し、地区の保健師さんたちと協働しながら在宅ケアをおこ



なっています。

諏訪中央病院の医師をはじめ、たくさんの医師にも協力してもらいました。石巻訪問看護ステーションも立ち上がりましたがステーションの5台の車は流れてしまっていました。地元の訪問看護ステーションが復旧し、地元の医師や看護師が石巻の被災者を救えるようになるのが本来の姿と考え、JIM-NETは皆さまからいただいた貴重なご寄付の一部で中古の軽自動車を寄付しました。とても喜ばれています。石巻の町の中を、石巻の看護師さんが運転する車、JIM-NET号と書かれた小さな白い車が走っています。皆さまからいただいた温かなお心を乗せて、石巻の瓦礫の町の中を JIM-NET号がスイスイと走っていきます。復興の小さなシンボルのひとつです。



希望の湯でボランティアの東北大学学生たちと

**本当に皆さまのご協力に、厚く、厚く、厚く、厚く、感謝をします。
これからもご支援よろしくお願い致します。**

イラクと被災地

佐藤真紀 (JIM-NET事務局長)

被災地に入って、まるで戦争で根こそぎやられたような感じがした。自衛隊や、米海兵隊の車両。避難所は、イラクの難民キャンプを、彷彿させる。

津波は、必要だったと言う人はいない。しかし、戦争には、たとえばイラク戦争は、必要な戦争だという人達がいる。そこにいる人たちの苦しみは同じなのに。

震災が起きた日、イラクから電話やメールが届く。「みんな大丈夫ですか」という安否確認がほとんどだった。「イラクにいる私たちすべては、日本で起きたことに深い悲しみを感じ、皆様の安全と、回復を心から祈っています。バスラ医師会として、もし必要ならば、医療チームを派遣する用意があることを、喜んでお伝えします」アサド医師。

バグダッドからも、マーゼン医師は、「一か月分の薬の支援はいらない。周りに声をかけてバグダッドで調達するから」と言ってくれた。そして、僕たちが支援した患者からもメッセージがとどいた。

ハウラ(15歳)は、日本の支援で、白血病が治り、サマワという町で元気に暮れしている。

「イラクからみなさんへ

私は、地震の話聞いて日本の皆さんのことが、とても心配になりました。早く良くなるように祈っています。皆さんのことを思って、たくさん「赤い花」の絵を描きたい。皆さんに赤い花を届けたいです。私の

心はいつも皆さんと一緒にです。」

イラク大使館は、私たちのお風呂が「希望の湯」と呼ばれているのにちなんで「希望」という字をアラビア語で書いた日本手ぬぐいを作った。被災地まで配りに来てくれた。バグダッドでは、子どもたちが4月23日にチャリティコンサートを開いてくれた。

みんなで力を合わせて、日本を復活させよう。それは、イラク戦争等に加担する国ではないはずだ。核兵器や、劣化ウラン弾、地雷やクラスター爆弾など市民を苦しめる兵器を根絶する武器を輸出しない。いい加減原発技術を海外に売りつけない。そんな国として復活したい。世界の皆が望んでいることだ。



津波と火災の被害にあった門脇小学校 (石巻市)

河北地区での医療支援

川添圭子 (JIM-NET看護師)

宮城県石巻市に来て8週間が経ちました。

石巻市や石巻市赤と交渉を行った結果、旧河北町(宮城県東北部にあった町。合併により現在は石巻市)において地域医療のお手伝いができることとなったため、ここから活動を開始し現在に至っています。

地域医療を開始した当初は医師がおり往診という形での活動となりましたが、医師の継続的な確保が困難でありJIM-NET医療班には看護師のみであったことから、訪問看護という形での活動としました。

現在、JIM-NET医療班では4つの大きな柱を立てて活動しています。

① ローラー (ニーズ調査)

地区を決め、その地区の全戸訪問と世帯調査をし、その中から医療や介護のニーズを洗い出します。

② 要介護ローラー

旧河北町内で介護保険を利用している方にターゲットを絞り訪問し、安否確認や問題聴取を行っています。

③ 訪問看護

地元のケアマネジャー・保健師からの依頼で身体ケア

を行っています。

④ 診療所での診療

ある地区の避難所を診療所として解放していただき、毎週決まった曜日に出向き、診療業務を日本プライマリケア連合学会とともにを行っています。

このような活動を継続してきた結果、少しずつですが地域の方の信頼を得られるようになってきたと思われます。今後も地元の保健師・ケアマネジャーとも話し合いをし在宅にいらっしゃる患者さんに一番良い形できめ細かい看護を提供できたらと思っています。

被災地の医療は徐々に回復してきましたが、まだまだ避難所生活を余儀なくされている方々や、かかりつけ医が津波で流れた方もたくさんいらっしゃいます。さらに、地震後から認知症が進行してしまった高齢者の方、そこに震災後から寄り添い続け、介護に疲れてしまっているご家族もたくさんいます。これからも、少しでもそうした方々の力になれるような活動を模索し、継続していきたいと思っています。

3.11後の被災地と千人風呂プロジェクト 熊谷宏（JIM-NETスタッフ）

宮城の被災地へ

今回の震災でいち早く行動を起こしたNGOは山形の国際ボランティアセンター山形(IVY)でした。3月14日に「東北広域震災NGOセンター」を立ち上げ、連日山形から日帰りで宮城県内の被災地に通って被災者の要望を聞き、その翌日から翌々日にはそれを届けるというやり方できめ細かい支援をしていました。

日々送られてくるIVYの支援報告を読み、その行動力と活動内容に敬服しつつも、何も出来ずにいる状況に悶々としながら数日が過ぎました。そしてようやくJIM-NETもIVYが立ち上げた「東北広域震災NGOセンター」に参入し、緊急救援に着手することになり、19日夜、空路山形に入りました。東北新幹線は不通で、クルマで行こうにも東京でもガソリンがなかなか買えなかったのです。翌20日から「東北広域震災NGOセンター」のメンバーとして、緊急車両以外通行を許されなかった東北道をひた走って被災地へ支援物資を届けながら宮城県内の被災地の調査を始めました。実際に目にした被災地の様子は、それまでメディアを通して見たり、先に被災地に入った知人のジャーナリストから聞いたりしていた以上に凄まじいものでした。とりわけ宮城県北部の南三陸町、女川町、石巻市雄勝地区といったリアス式海岸に面した地域は、「破壊」や「壊滅」という言葉を実像として突きつけられているように感じられました。

「歯ブラシとハミガキがほしい」、「防寒肌着を持ってきてほしい」、「水のいらないシャンプーはないのか?」、震災から1週間以上の時間が経った被災者のニーズは、既に生命の維持に直接結びついたものからは離れていました。そして、言ってみれば「日常生活を取り戻す」ためのさまざまなニーズが私たちに寄せられました。日々刻々と変化するそれらのニーズに出来る限りの対応をしながら、行政が指定した避難所以外にも被災者が寄り添うように避難生活をしているところが各所にあったので、支援からもれていないところはないか調査をしながら、山形から被災地への日帰りの支援が続きました。

千人風呂プロジェクト

4月に入ってから、石巻市湊地区の避難所になっている小さな集会所に、鎌田代表の「多くの被災者に入浴サービスを!」という呼びかけに呼応して仮設風呂が作られましたが、この仮設風呂は地元との調整等がうまくいかずに1度きりで撤退を余儀なくされました。でも「あきらめない」鎌田代表の意思を汲んで、すぐに同じ石巻市の中心部にある永巖寺に、JCFの元事務

局長の高橋卓志さんが松本市のルピナ中部工業等の協力を得て仮設風呂を設置してくださいました。そして4月8日にスタートしたその仮設風呂の運営がJIM-NETに託されることになりました。

永巖寺の境内では「中央正和会」という地元の防災会が、震災直後から炊き出しを行ったり、支援物資の配給の取次ぎや行政へのニーズのとりまとめを行ったり、震災に乗じた窃盗団等から地域を守るために防犯パトロールを行ったりしていました。各メンバーは、自らが被災者であるにもかかわらず、24時間体制で地域のために働いていました。震災からおおよそ一ヶ月、中央正和会のメンバーの疲労もピークに達していました。仮設風呂を立ち上げた高橋さんからの引継ぎの最重要事項は「地元は一切負担をかけるな」というものでした。現地入りしてから3週間、ありがた迷惑な独りよがりの支援を少なからず見てきました。自らの活動がそうならないよう肝に銘じながら、高橋さんの呼びかけで駆けつけてくださった若林民衛さんとの「不動の湯」の番台業務が始まりました。

次に、鎌田代表の呼びかけに新潟の企業が中心となって、廃材を燃料とするボイラーを持った大きな仮設風呂が北上川対岸の湊小学校に作られました。この風呂は亀山紘石巻市長により「希望の湯」と命名され湊小学校に避難してる被災者が主体となって運営されることになりました。しかし、実際には被災者だけで運営していくのはかなり困難であるということが、企業、被災者とのミーティングでわかりました。

せっかくの設備が稼動しないかもしれない、校庭で行われる仮設風呂建設を教室の窓から見ていた被災者たちを落胆させるわけにはいかないと、JIM-NETの要請で現地の支援に入っていて、このミーティングに参加していたアラブの子どもとなかよくする会の西村陽子が手を挙げ「希望の湯」の運営をJIM-NETが行うことになりました。

日本人にとってお風呂はただ単に体の汚れを落とすためのものではありません。一日の疲れをとり明日への活力を養うリフレッシュの場であり、複数の人間が一緒に入浴する大きなお風呂はコミュニケーションの場でもあります。そんな場を提供すべく、私たちが日夜腐心したことは、被災者の皆さんとのコミュニケーション作りでした。

現在、二つの風呂は、地域の皆さんや避難所の皆さんの協力、そして多くのボランティアの皆さんやお風呂関連グッズを提供してくださった皆さんの協力を得て円滑に運営されています。一日も早く避難所がなくなり、人々が自宅で入浴できるようになればいいと思います。

2002年9月、僕が初めてイラクに行った時、バグダッドで最初に出会った子どもが、スハッド（当時9歳）だ。父が音楽・バレエ学校の用務員をやっているの、5人の子ども達は学校に住み込んでいた。彼女が描いた少年が手を広げている絵に、「イラクを攻撃したら世界は平和になりますか？」と書き加え、反戦のポスターを作った。

残念ながら、戦争は止められなかったが、一家は庭に防空壕を掘って生き伸びた。数年後、決して裕福だとは言えないスハッドが音楽を続けていることを聞いて驚いた。

イラクでは、音楽は、一般の学校ではまず教えない。音楽・バレエ学校に通っているのは、お金持ちや、ちょっとしたインテリの子どもたちだけだ。スハッドは、オーボエだが、楽器がなかったので買ってあげたこともある。

カリーム・ワスフィは、イラク交響楽団の音楽監督を務めている。「日本とイラクは、ともに、恐ろしい戦争の目撃者です。日本とイラクが手を取り合って、平和をつむいでいければいいなと思っています。音楽に出来ることを追求していきたい」。彼は平和のための音楽プロジェクトと銘打って、青少年オーケストラを運営している。スハッド達はこの楽団のメンバーになっていた。楽団の中に、シーア派やスンナ派、キリスト教徒、クルド人も混ざり粛々と演奏している。周囲で宗派対立が激しくても、音楽への志は、対立を乗り越えてきた。



バグダッドのタハリール広場

上を向いて歩こう

今回、イラク交響楽団から、是非、日本の曲を演奏して、力になりたいと言う申し入れがあった。「上を向いてあるこう」を演奏してくれることになった。

4月23日、会場となったホールには、250人ほどの観衆が来てくれた。支援をしている小児がん病棟のマーゼン医師やターリク医師も家族や、闘病中の子ども達を連れて来てくれた。

会場では、JIM-NETが支援している石巻の避難所の様子や、被災者からのメッセージを紹介し、募金箱も置いた。4万円近くのお金が集まり、後日、津波で流されてしまった石巻の相川小学校にこのお金を届けることができた。



2002年、当時9歳のスハッド

残念ながら嵐のために飛行機が遅れ、僕がバグダッドに着いたころにはコンサートが終わってしまっていた。後で見たビデオからは、素晴らしいコンサートだったことが感じられた。7年ぶりに訪問したバグダッドの様子を少し書いてみよう。

【汚い街】

まず、飛行場に到着して驚いたのは、2002年頃と比べると変わってなくて、建物はぼろぼろのままだ。イラク航空は、コンピュータで座席を管理できないのか、全員が勝手に座る。前近代的な航空会社である。町の汚さは、排水が悪く汚水が道にあふれていたり、ごみの回収がなかったり、電線が恐ろしいほど絡んでいる。盗電も当たり前ようだ。

保健省や、文化省に挨拶に行ったが、これも、建物は、2002年とほぼ変わらず、職員も旧態依然といった感じで、ともかくたらいまわしにされてしまう。僕たちが活動しているアルビルでは飛行場も新しくなり、巨大モールが出来ている。周辺諸国のヨルダンやシリアでもここ数年で、町はめまぐるしく発展している。しかし、皮肉なことにイラクの首都バグダッドが、最も遅れているのだ。



オーボエを演奏するスハッド。コンサートの様子は、
<http://www.jim-net.net/news/report/2011/04/post-227.php>



バグダッド市内:なんともかわいらしい交番



コンクリートの塀が街を守っている

【良くなった治安】

2003年ごろは、米軍があちこちで見張りをしていましたが、今では、イラク警察とイラク軍に任されている。チェックポイントが数百メートルごとにあり、イラク警察も装甲車を用いて頻繁にパトロールをしている。コンクリートのブロックが町を区分し、要塞のようだ。そのせいもあり、バグダッドの渋滞はひどい。誘拐は減ったが、爆弾テロは、余り減っていないようだ。それでも、治安は確実に良くなっていると感じた。

【子どもたちのイラク】

コンサートの翌日、スハッドの家を訪ねた。学校にはもう住めなくなったそうで、バグダッドの郊外に安いアパートを借りていた。兄弟がみんな音楽を演奏する。アブディ(バイオリン11歳)、ハディール(バイオリン15歳)、ムハンマッド(ホルン16歳)、スハッド(オーボエ18歳)の4人がオーケストラのメンバーである。

「コンサートは、たくさん来てくれて嬉しかった。

日本の皆様が元気になって欲しい。日本の子ども達がたくさん亡くなったと聞いて心配です。でも日本は強い国だから、きっと立ち直る。前より良くなってほしい。」ムハンマッド

「日本の曲は、3日間で仕上げました。もう少し時間がほしかったけど。日本の人たちを助ける事ができると良いですね。私たちが助けてもらったように。このコンサートは私たちからのプレゼントです。日本から寄付していただいた楽器で、日本のために演奏できてとても嬉しいんです。」スハッド

予想以上にぼろぼろだったバグダッド。支援先の病院も訪問したが、骨髄移植には程遠い。これが誰もが憧れる首都バグダッド?というのが実感だ。それでも子どもたちは成長し続けていた。もう、スハッドは子どもではなくなり、今のイラクを作り上げる重要な大人達に仲間入りしていた。このことは、日本に向けた力強い励ましのメッセージだと感じる。



バグダッドのセントラル小児教育病院では、院内学級を開始



アルビルでは、JIM-NETの事務所を開設。ナナカリの医師達が訪問し打ち合わせ。

4月からアルビルの活動の担当者として同地に滞在しています。このアルビルの町について少しご紹介しますと、アルビルはイラクの北部に位置する国内のクルド自治区の「首都」です。クルディスタンの苦難の経験や歴史を経て、現在のアルビルは、今やイラクで最も平和で大きな経済発展を見せる町として、活況と安定を見せています。週末になるとイラク各地からアルビルのショッピングセンターへの日帰りツアーが組まれ、大型バスで沢山の人がやってきます。周辺国からのビジネス進出にも伴い、海外労働者も続々と到着しており、私も日参した滞在許可の取り扱い事務所には、毎朝大勢の外国人が詰めかけ申請手続きに列を作っています。モノと人の集中する現在のアルビル、バブル期とも言うこともできますが、人々の表情は明るく穏やか、長い苦難の後に訪れた「この世の春」を享受、謳歌しているようにも映ります。この町の躍進のピークは既に2年程前だったとも聞いていますが、いずれにしても急激な発展後、今後この町や人々はどのように変化していくのだろうか、日本人としてはふと考えるところでもあります。人情味豊かで、そこに熱いクルドの血潮も流れているアルビルの町と人々。既にアルビル最前の私ですが、この一年間、その魅力満喫しつつ、日々変化していくアルビルに興味深く

観察していくことになりそうです。

さて、私のアルビル活動の拠点になるのが、ナナカリ病院です。ガン専門の国立病院として7年前に設立した病院です。JIM-NETでは、小児科の入院病棟を主な支援対象として、薬剤支援、感染症予防資材支援、検査のための必要物品支援、日本人看護師から当地の看護師への技術支援などを実施しています。数少ないガン専門病院ということでイラク中から大勢の患者が訪れており、外来、急患棟は常に患者とその家族であふれています。サーミー院長の話では、患者の約半数がクルディスタン地域内から、半数がバグダッド等、遠方からやって来るとのこと。2階建ての病院は病室もベッド数も足りず、現在隣の敷地に5階建ての新病棟を建設中、約一年後に完成予定です。

以上、到着から1か月、生活も活動もまだまだこれからといったところですが、まずは「1か月報告」を、この数週間で会った病院の子供たちの写真とともにお届けします。



病院内で遊ぶ子どもたち

参加団体ご紹介 (No.6) 認定NPO法人 JCF/日本チェルノブイリ連帯基金

神谷さだ子 (JCF事務局長)

JCF/日本チェルノブイリ連帯基金は、1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の大爆発事故による放射能被災地の「子ども達の命を救おう」と設立しました。信州大学医学部の協力を得て、小児甲状腺がんや小児白血病の診断と治療を、現地医師をサポートする形で行なってきました。そして2004年からJIM-NETの参加団体として、イラクの小児白血病・小児がんの子ども達への支援を行なっています。

現在、3月11日の東日本大地震と津波、そして福島第一原発事故の被害が重なった福島県南相馬市への支援活動を始めました。チェルノブイリへの活動を20年続けてきた経験知と言ったらいいでしょうか、事故直後からメルtdownやチェルノブイリ並みの放射性物質による汚染が心配されてなりません。3月21日から南相馬市に支援物資を運び諏訪中央病院の医師チームと共に活動しています。諏訪中央病院の医師、看護師、薬剤師さん達は南相馬市立総合病院の外来と当直、4ヶ所ある避難所の健康診断を行なっています。

3月中、原発から23キロの南相馬の中心地区は屋内退避区域で、人々は外に出ることができず物流も止まっていました。2か月たって緊急時避難区域になり、

物流が復活したことで職場が再開し、学校も北部の比較的、放射性物質の線量が低い地域では新学期が始まりました。JCFは、妊婦さん、乳幼児、児童を放射線被害から守りたい、と長野県への避難を呼びかけました。しかし、保護者の仕事がある、学校の友達と離れたくない等の理由で、福島県外へ避難を希望する家族はいませんでした。そこで、今、子ども達を守るために、長野県に夏休みに保養に来てもらう、健康診断を年2回定期的に行なっていく、外部被曝と内部被曝を定期的に測定する等のプロジェクトを進める計画です。内部被曝を測るホールボディカウンターが福島県には無いなど問題は山積していますが、さまざまな分野の方からのアイデアをいただき、できるところから進めたいと思っています。

皆さんからのご協力をぜひお願いいたします。



福島県南相馬市石神小学校
避難所にて健康診断

JIM-NET 新現地スタッフよりご挨拶

3月にジムネットに入りました阪口佳代です。4月からイラク北部の町アルビル(Erbil)に駐在しています。これから1年間、プロジェクトマネージャーとして現場活動の実施担当をすることになりました。こちらに到着して1か月が経ちましたが、到着以来、毎日沢山のの人に会い、沢山の話を聞いているところです。感心したり驚いたり、楽しかったり興味深かったり、時に悲しいこともあり毎日考えることの沢山あるアルビル生活が始まりました。今後の私の業務は、これまでの医薬品や治療費支援を続けながら、それらの支援をより円滑で効果的なものにするために病院や関係組織とよりきめ細かい協力関係を築くこと、ジムネットの存在や活動をこちらの人々に広く知ってもらい理解や協力を得ること、その上で日本とアルビル現場が共にプロジェクトを考え、進めていくようにすることです。イラクそして日本の皆さまと一緒に活動に取り組んでいきたいと思っています。



日本の事務局には、現在も東北支援のためのご支援が集まっていると聞いています。これまでのイラクでの活動を見守り応援してくださった方々が今は東北支援にも力を貸してくださっていること。アルビルの人々も日本への心配や励ましを伝えてくださること。日本、イラク両方からの応援、これまでのイラクでの現場活動があってこそだと考える時、今後の私のイラクでの活動にも、もう一つ大きなミッションが加わるように感じます。今の私たちにできること、私にできること、これも毎日考え続けながらアルビルでの活動により一層努力して参りたいと思っています。皆さま、1年間どうぞよろしくお願いいたします。

ハウラが描いたピンクの花のガーゼタオルストール

白血病を克服した少女ハウラが描いたピンク色の花がストールになりました。これは出島プロジェクトの協力により愛媛県今治市の丸栄タオルが製作してくれることとなったもので、Japanese Craftsmen with Iraqi Children Artists(日本の職人とイラクの子どもアーティスト)の頭文字をとって、JCICA(ジェシカ)というブランドで販売しています。ハウラのピンクの花とガーゼのやわらかな風合いはオールシーズンOK。綿100%なので汗をかいも洗濯ネットに入れて洗濯機で洗えます。160cm x 50cmの大判サイズなので肩掛けや膝掛けにも使えます。販売価格は1枚3,600円(税込)。価格の2割程がJIM-NETへの寄付となります。購入ご希望の方は以下のサイトよりお申し込み下さい。数に限りがございますので、お早めのご購入をお勧め致します。

SHOP出島DEJIMA

<http://dejimajapan.com/>

尚、インターネットをご利用にならない方は、以下の電話番号にて受け付けいたします。03-3821-5238



局長くん 第6話 高橋マリモ

イラク大使館が日本手ぬぐいをつくった!



サブリーンの絵を入れてもらった
なんて書いてあるかわかる?
ともだち? がんばれ?



嬉しいね 希望を持ってくださいな!



マーリキ首相
日本支援表明!

学校をつつて
欲しいな



編集後記
街角や庭先に紫陽花が
咲く季節となりました。
夏も近づいているよう
です。夏を象徴する向日葵
の花。放射能で汚染され
た土壌を浄化する効果が
あるといわれ、福島では
種まきも進められている
ようですが、まずは大き
な花を咲かせて日本の夏
に元気を与えてくれるこ
とを願っています。

JIM-NET便り 2011年6月号

発行: 日本イラク医療支援ネットワーク

発行日: 2011年6月20日

〒171-0033

東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303

info-jim@jim-net.net ☎ 03-6228-0746